大妻多摩中学校

二〇二六（令和８）年度

入学試験問題（第二回）

【国　語】

時間　50分

2月1日（日）

【注意事項】

1　問題は18ページまであります。

2　指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

3　答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。

4　句読点やカギカッコは一字と数えてください。

5　ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本社会の生きづらさの源は、全員に画一的な「正解とされる生き方」を押しつける①□調□力にあると思います。

人それぞれ、自分が楽しいと思える人生を自由に選べるようになるには、「幸せな生き方にはさまざまなパターンがあり、ひとつの生き方を全員に押しつける必要はない」と理解することが必要です。

そしてそれを実現するには、それぞれの人が「自分はこういうふうに生きていきたい！」と、自分の希望＝自分の意見を明確にしなければなりません。

西欧社会では、子供が小さな頃から「自分の意見を明確にする」練習をさせます。幼稚園ではお気に入りのおもちゃをひとつ選ばせ「なぜこのおもちゃが一番好きなの？」と、自分の意見を説明させたりするのです。

「一番好きなおもちゃがどれか」という問題には正解がありません。だからすべての子供に意見が言えます。どの意見も「異なる」けれど、どれかひとつが正解なわけではありません。

こうした訓練を積み重ね、小さな頃から「他者と違う意見を表明することは、②怖いことではなく、あたりまえのことなのだ」と理解していくのです。

さらには「自分が好きなものでも、他の人には特におもしろくないものもある」とか「他の人がすごくおもしろいと思うものでも、自分にはおもしろくないものもある」といったことも学んでいきます。これこそ多様性への理解です。

「多様性のある社会」の実現には、全員が他人の目を気にせず、他の人と同じ意見かどうかなど気にせず、自分の意見を言えることが不可欠です。そして、人の数だけ存在する意見を認め合うのが「多様性のある社会」なのです。

「私はこのおもちゃが一番好き！」「俺は絶対コレ！」と、嬉しそうに意見を表明している子供がいるなか、「どのおもちゃが一番好きか、わからない」という子供がいたら、どんなふうに見えるでしょう？　なんだか「③□のない子供」「④□のない子供」

に見えないでしょうか？

日本では「意見より先に知識」を身につけさせようとします。でも、いくら知識を増やしても、どのおもちゃが好きかという「正解のない問題」の答えは見つかりません。そして、⑤人生において重要な問題はそのほとんどが「正解のない問題」なのです。

大切なのは「正解のある問題における正解を覚えること」ではなく、「正解のない問題について、⑥自分の意見を明確に言える子供に育てる」ことであり、「自分はこのおもちゃが好きだと思うけど、ママ、それでいい？」といった、答え合わせを必要としない、自分の意見に自信をもてる子供を増やすことなのです。

「全員が自分の意見をもつ社会」、そして「それを堂々と口にする社会」を、⑦日本人の多くは経験したことがありません。だからすぐに「そんな社会はギスギスして住みにくいのでは？」などと不安がります。

でも⑧そんなことはありえません。「私はこのおもちゃが好き！」「俺はこっちのほうが絶対におもしろいと思う！」という子供らがいたとして、みながそれぞれ違うおもちゃを「一番だ！」と断言したら、ギスギスするでしょうか？

ギスギスなんてしませんよね。むしろ「へー、ねえねえ、なんでそのおもちゃがそんなに好きなの？」といった他者への関心や対話が生まれ、多様な他者にたいする理解が進むはずです。

ギスギスするとしたら、「意見は多様」ということを理解せず「どのおもちゃが一番か、という問題には正解がある。したがって、おまえの選択は間違いである！」と言いだす人がいる場合です。

つまり、「意見には正しい意見と間違った意見がある」と勘違いしているから、「誰の意見が一番正しいか」を巡ってギスギスした相互否定が起こってしまうのです。

「いろいろな意見がありえる。正解なんて存在しない」とわかっていれば、自分の意見を明確にする際に、他者の意見を否定する必要はまったくありません。相手を説得したり、⑨相手の間違い（？）を正す必要もないのです。

ちなみに、どのおもちゃが一番好きかと問えば「これが絶対一番！」と断言できていた子供でも、大人になると「絶対にコレだ！」と断言できなくなる人がいます。それは、「⑩絶対」などという言葉を使ったら、反論されるかもと怖くなるからです。

そもそも意見を表明するときに「絶対」という言葉を添えるのは、「自分は、これが自分の意見であるということに絶対の自信をもっている」という意味に過ぎません。

「このおもちゃが絶対に一番おもしろい！」という言葉は、他にもおもしろいおもちゃがあるという事実を否定しているわけではなく、「〝自分は〟〝絶対に〟このおもちゃが一番だと〝思う〟」と言っているだけです。つまり、自分の意見にはブレがない、という意味での「絶対」なのです。

私もよく「絶対こう思う」という言い方をしますが、それは「自分の意見は絶対に正しい唯一の正解だ！」と言っているわけではありません。⑪「私はしっかりと考え尽くした。したがって、自分の意見がこういう意見であることに絶対にブレはない！」と言いたいだけです。

ところが、自分の意見を断言できるレベルまで考え尽くした経験のない人は、すぐに「絶対などありえない」などと言いだします。こういう人はおそらく「絶対にこれこそが自分の意見だ！」と確信がもてるまで、なにかについて考え尽くした経験がないのでしょう。このため「絶対」という単語を聞いたとき、「１００％正しく例外がない」という解釈しか思いつかないのです。

さまざまな方向から徹底的に考えたうえで自分の意見を明確化できれば、人は「たとえ他の人の意見とは違っていても、オレの意見は絶対にコレだ！」と言えるようになります。

そして、人生の多くの重要な決断については、「絶対にこの道だ！」と思えるレベルまで考え尽くすことが不可欠なのです。そうでないと、少し反対されただけで「やっぱりやめたほうがいいのかな？」などと気持ちがブレてしまいます。そして⑫世間がいうところの「よしとされている人生」を歩むことになってしまうのです。

もしあなたが自分の意見を「絶対にこうだ！」と思い込めないとしたら、それはまだ考える量が足りていない、ということです。しっかりと、誰に違うと言われても、「絶対にこうだ！」と言えるレベルまで考え尽くしましょう。

ここで大切になるのが、とにかく「自分はこれが好き！」と思える分野や生き方をきちんと選んでおくことです。なぜなら人は、自分が大好きなことなら［⑬］考え尽くせるからです。

反対にいえば、考えるのが面倒（めんどう）になるようなことは、たいして好きでもないことなのです。たいして興味がないから、考え続ける意欲が続かないのでしょう。

自分が心から好きだ、心地よい、楽しいと思える生き方や分野を選び、その道を選んだ理由についてはしっかりと考え尽くす。そうすれば、誰に反対されようと、もしくは、そういう道を選んだ人が極めて少なくても、「自分は絶対にこういう人生が送りたかったんだ！」と断言できます。

そんなふうに思える人生を選べたら、本当に幸せですよね。

（ちきりん『自分の意見で生きていこう――「正解のない問題」に答えを出せる４つのステップ』〔ダイヤモンド社〕より）

問1 ――線部①の二つの空欄に適切な漢字をそれぞれ一字ずつ入れて、四字の言葉を完成させなさい。

問2 ――線部②「怖(こわ)い」とありますが、多くの人が「怖い」と感じてしまいがちな理由として、本文の内容に照らして**最も誤っていると考えられるもの**はどれですか。次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の答えが間違っているのではないかと考えてしまうから。

イ 自分の答えを他人に否定されたらどうしようと考えてしまうから。

ウ 人と違ったことを言うと周囲との関係が悪化するのではないか、と考えてしまうから。

エ 他人を説得することは想像以上に大変なことなのだろうと考えてしまうから。

問3 文脈から考えて、［③］・［④］に入れることが出来る言葉として最も適切なものを次の**ア**～**キ**の中から二つ選び、記号で答えなさい。どちらを先に答えてもかまいません。

ア 自営　**イ** 自我　**ウ** 自信　**エ** 自然　**オ** 自発　**カ** 自明　**キ** 自立

問4 ――線部⑤「人生において重要な問題はそのほとんどが『正解のない問題』なのです」とありますが、「正解のない」「人生において重要な問題」とは、例えばどのような問題ですか。《……、**という問題。**》という形で、考えて答えなさい。

問5 ――線部⑥「自分の意見を明確に言える子供に育てる」とありますが、その際に子供にやらせる練習として効果的だと期待できるのはどのようなことですか。最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 興味を持った歴史上の人物について、その人物の魅力をクラスメイトに説明する、ということ。

イ 将来の職業について、どのようなことをしてみたいのかを、時間をかけて考える、ということ。

ウ 自分の好きなスポーツについて、そのスポーツを知らない人にルールの説明をする、ということ。

エ ある交通規則について、なぜそういう規則が出来たのか、班ごとに調べて発表する、ということ。

問6 ――線部⑦「日本人の多くは経験したことがありません」とありますが、日本人に経験が少ないのはなぜだと考えられますか。その理由を、「日本では」で始まる五十字以内の一文で説明しなさい。

問7 ――線部⑧「そんなこと」とありますが、何を指していますか。それを説明した次の文の空欄 X ・ Y に当てはまる言葉を答えなさい。ただし、 Y に当てはまる言葉は、本文中から抜き出すこと。

X 人ばかりだと、世の中が Y しまう、ということ。

問8 ――線部⑨「相手の間違い（？）を正す」とありますが、「（？）」が付けられているのはなぜだと考えられますか。その説明として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 間違っているのか正しいのか、筆者にも判断がつけられずにいるから。

イ 最初は間違っていても、正した後にそれを「間違い」と呼ぶことはおかしいから。

ウ そもそも「間違い」として捉えること自体おかしいのだという考えが根底にあるから。

エ それが間違っているのかどうかを、読者にもよく考えてほしい、と筆者が考えているから。

問9 ――線部⑩「絶対」について。本文では、二種類の意味の「絶対」が使われています。その意味を説明している部分を、本文中からそれぞれ十二字以内で抜き出しなさい。

問10 ⑪ に当てはまる言葉として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 暗に　**イ** 現に　**ウ** 真に　**エ** 単に

問11 ――線部⑫「世間がいうところの『よしとされている人生』を歩む」とはどのようなことですか。説明として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世の中の多くの人々が羨ましいと思うような生活を送る、ということ。

イ 自分の希望は抑えて、世の中の多数の考えに合わせてる生きる、ということ。

ウ 何が学問の世界では正しいとされているのかを常に考えながら生きる、ということ。

エ 失敗を恐れて、やりたいことを我慢して安全な道ばかりを選ぶ生き方をする、ということ。

問12 ⑬ に当てはまる言葉として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア サクサク　**イ** トコトン　**ウ** ピッタリ　**エ** メッキリ

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

建設会社に勤務する山川（本文中の「私」）は、釣りに出かけた自然豊かな桑畑村で浩之と出会い、親しくなる。数年後、浩之からの久しぶりの電話で、村でリゾート開発が進められていること、しかもそれを進めているのは山川の勤務する会社であることを知る。開発予定地は、粘土層の斜面の上に「地滑り土塊」が載っており、雨が降ると地滑りを起こす危険性が高いという。浩之から「開発をやめるよう社内で掛け合ってみてもらえないか」と嘆願された山川は、板ばさみになりながらも、社内の友人・久坂から情報を集め、関わりがあると思われる宮口本部長に声をかける。本部長からは、「一分だけ」という条件で話すことを許される。

「じつは、桑畑村のリゾート開発の件なんですけど」

私が切り出すと、宮口本部長は、ゆっくりと振り向いた。そして、①やわらかな笑みを浮かべたまま、少し低い声を出した。

「ほう。（注1）総務の君が、どうしてそんなことを？」

「ええと……」

久坂に話したように、前置きから説明をしていたら、とてもじゃないが一分では足りない。だから私は、単刀直入に結論から話すことにした。

「②できれば、あの村の開発を見直して頂けたら、と思いまして……」

すると、宮口本部長の目からすうっと温度が消えた。顔は微笑んでいるのに、目は怜悧に光っているのだ。

「つまり君は、あの開発を中止しろと、私に進言してるわけ？」

ひんやりとした目にまっすぐ見詰められた私は、心の内側に苦い毒を塗られたような怖さと不気味さを感じた。

「あ、いえ。進言だなんて、そんな大それた……」

「違うの？　じゃあ、どういうことかな？」
「ええと――、開発の企画が見直される可能性はあるのかどうか、その辺が、ちょっと、気になっていまして」
宮口本部長は、あらためて私を見た。③頭のてっぺんからつま先まで、舐めるように確認していく。
「何度も聞き返して悪いけど、君は、総務の――、ええと」
「山川……です」
「そう。山川くんだったね」
「はい」
「約束の一分は過ぎたけど、まだ続けるのかな」
宮口本部長は、霧雨のような粘っこい視線を私から外すと、再び窓の外を眺めてコーヒーをひとくち飲んだ。その横顔を見上げながら私は恐るおそる言った。
「できれば、あと、ほんの少しだけ、よろしいでしょうか」
宮口本部長は、何も言わず薄墨色の空を見上げた。そして、苦々しいため息のように、小さくつぶやいた。
「④朝っぱらから、嫌な空だよねぇ」

午後一時――。
社員食堂でランチを食べ終えた私が自分のデスクに戻ると、ふいに背後から肩を叩かれた。
「山川、ちょっといいか」
驚いて振り向くと、直属の上司である総務部長の合田が難しい顔で立っていた。
「え？　あ、はい」
「会議室な」

顎で背後を指し示した合田部長は、そのまますたすたと大股で会議室へと入っていった。
私も慌ててその背中に続いた。
合田部長は、強面でがらっぱちな人と見られがちだが、性格はさっぱりとしていて裏表がなく、「根はいい人」で通っている。そんな人が、いまみたいに言葉少なに顎で部下を呼び出すのは珍しい。
これは、かなりまずそうだな——。
私は緊張で首をすくめながら、「失礼します」と会議室の扉を開けた。
「そこ。ブラインド、下ろして」
すでに椅子に腰掛けていた合田部長が、私に指示した。
⑤ただならぬ二人の様子を、総務部の同僚たちがガラス越しに見ているのが気になるのだろう。
「はい」
私は、言われるままにブラインドを下ろし、外から会議室のなかを見られなくした。
「座って」
「はい……」
神妙な面持ちで、私は合田部長の正面の椅子に腰掛けた。
「山川」
「はい」
「お前、もう自分が何を言われるか、分かってるよな？」
そう言って、合田部長は腕を組んだ。
「……なんとなく、ですけど」
「ってことは、最初から問題になると分かってて、お前は宮口本部長に声をかけたってことか？」

「すみません……」
私は頭を下げた。
「はあ……」と、深いため息をこぼした合田部長は、貧乏ゆすりをはじめた。「さっき、いきなり宮口本部長から（注2）内線がかかってきて、一緒にランチをって誘われたんだよ」
「はい……」
「そんなの、はじめてだからさ、もしかして、俺を営業に引っ張ろうとしてくれてんのか？　なんて、⑥勘違いしちまったよ」
「……」
そういえば以前、合田部長と飲んだとき、「俺、本当は、総務じゃなくて、営業に戻りたかったんだ」と、ボヤいていたのを思い出した。
「で、いざ、ランチに同席したら――」
「……」
「まさかの、お説教ときた」
「すみません」
「宮口本部長、お前の素性をあれこれ訊きまくってよ、しまいには何て言ったと思う？」
「分かりません……」
私は、うつむき加減で首を横に振った。
「お前のこと、あの山川という男は、社内の危険分子じゃないのか――だってよ」
「そんな……」
「そんな、じゃねえだろ」
「……」

「言っとくけど、俺は必死に庇ってやったんだからな。そしたら、あの人、『つまり君は、部下の教育が苦手だってことかな？』なんて、ねちねちと三〇分も嫌味を言い続けてよ」

「……」

「なあ、山川」

「はい」

「お前、いったい宮口本部長に何を言ったんだよ？」

「え……、本部長からは、何も聞いてないんですか？」

「俺が訊いても、ざっくりとしか教えてくれねえんだよ。だから、いま、ここで、お前がすべて話せ。ちゃんと、具体的にだぞ」

「ええと……」

「なんだ」

「宮口本部長が教えなかった――ということは、もしかして合田部長に知られたくない、ということでは……」

「だろうな。でも、俺には知る権利がある。そうだろ？」

そう言って合田部長は、フン、と鼻を鳴らした。ようするに、理由をちゃんと知らされないまま［⑦］だけ言われ続けたことに腹を立てているのだろう。

「分かりました……」

すでに［⑧］している気の小さい私は、いったん大きく息を吸ってから、今朝の宮口本部長とのやり取りを具体的かつ丁寧に、合田部長に伝えた。

説明の途中、推進派のやり口には明らかに問題があって、とりわけ「地滑り土塊」の情報を隠したりするのは危険だし違法ではないかと伝えた――、という話をしていると、合田部長は「なるほど。⑨そういうことか」とつぶやいた。

そのつぶやきに理解を得た気がした私は、思わず「やっぱり部長もまずいと思いますよね？」と、少し身を乗り出したのだが、そ

れも一瞬で出鼻をくじかれてしまった。
「阿呆か、お前。今度は俺を説得しようってか？」
「あ、いえ、そういうわけでは……」
「ふう……。俺はさ、お前のこと、性格は穏やかだし、つまらん問題は起こさないタイプの男だと思ってたよ。仕事だって、ちょっと神経質なくらい完璧にこなすし、遅刻もしないし、新人の面倒もよくみてくれる。それが、どうした？　いきなり、お偉いさんに直訴だなんて」
「すみません……」
「しかも、国を巻き込んだプロジェクトを中止にして欲しいだ？　お前、自分を何様だと思ってんだ？　阿呆なのか？」
たしかに阿呆だとは思う。でも――。
うつむいたまま私が黙っていると、しゃべりながらどんどん苛立ちをヒートアップさせてきた合田部長が、急に声のトーンを下げた。
「いいか、山川。その桑畑村とやらのリゾート開発の企画はな、そもそも宮口本部長が発案して、それから何年もかけて自治体や各省庁に働きかけて、やっとモノにした肝いりの大事業らしいぞ」
「え……」
それは初耳だった。今朝、宮口本部長は、そのことを私に黙っていたのだ。
「それを、お前は――。首にされたいのか？」
「いえ、まさか」
「じゃあ、どこか途上国に左遷されたいか？」
その言葉を聞いたとき、私の脳裏に、妻の麻美と息子の建斗の笑顔が思い浮かんだ。
「いいえ……」

「ったく――、はあ」
自分を庇ってくれた上司が、魂ごと吐き出してしまいそうな深いため息をついた。
私は、心から申し訳なく思えてきて、椅子から立ち上がった。そして、⑩深く頭を垂れた。
「今回は、自分ごとのために出すぎた真似をしました。本当に、すみませんでした」
「はあ……」
再び合田部長のため息がこぼれた。
でも、それを機に、⑪合田部長の貧乏ゆすりは止まった。

（森沢明夫『桜が散っても』〔幻冬舎〕より）

（注1）総務――総務部。会社の部署の一つ。ほかに営業部などがある。
（注2）内線――会社内で通話できる電話システム。

問1 ――線部①「やわらかな笑みを浮かべたまま、少し低い声を出した」とありますが、このときの宮口本部長の心情として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 部下でもない総務部の社員が話題にしたことに対し、不審に思い身構えた。
イ 部下でもない総務部の社員が話題にしたことに対し、怒りを抑えきれなかった。
ウ 部下でもない総務部の社員が話題にしたことに対し、威圧された気持ちになった。
エ 部下でもない総務部の社員が話題にしたことに対し、想定外の面白さをおぼえた。

問2 ――線部②「できれば、あの村の開発を見直して頂けたら、と思いまして……」とありますが、山川がこのように進言した一番の理由は何ですか。次の空欄にあてはまる五字を本文中から抜き出しなさい。

開発地には［　　］があり、このまま開発を進めるのは危険だから。

問3 ――線部③「頭のてっぺんからつま先まで、舐(な)めるように確認していく」とありますが、これはどのようなまなざしでいることを言っているでしょうか。これを描写した部分を本文中から探し、十二字で抜き出しなさい。

問4 ――線部④「朝っぱらから、嫌(いや)な空だよねぇ」とありますが、この言葉に込められている気持ちとして最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 天気の話をしながら考える時間がほしい、と希望する気持ち。

イ 嫌な天気ではあるがこれから仕事だ、と気合いを入れる気持ち。

ウ これ以上会話につきあうつもりはない、と突き放す気持ち。

エ お互い朝から雨に降られて大変だ、と共感する気持ち。

問5 ――線部⑤「ただならぬ二人の様子」とありますが、なぜ同僚たちはそのような印象をもったと考えられますか。本文中の言葉を使い、四十五字以内で答えなさい。

問6 ――線部⑥「勘違(かんちが)い」とありますが、合田部長は、何をどう勘違いしたのでしょうか。四十五字以内で答えなさい。

問7 ⑦ にあてはまる語を本文中から二字で抜き出し、答えなさい。

問8 ⑧ にあてはまる四字熟語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 意気消沈　**イ** 意気軒昂　**ウ** 意気揚揚　**エ** 意気衝天

問9 ――線部⑨「そういうことか」とありますが、ここで合田部長が納得したことは、どんなことですか。最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宮口本部長が怒ったのは、自ら発案し何年もかけて実現にこぎつけた開発計画に対し、山川がストップを申し入れたからだ、ということ。

イ 普段は問題を起こさないタイプの山川が直訴までしたのは、推進派のやり口に違法性が指摘できるなど、それだけの理由があるからだ、ということ。

ウ 宮口本部長が理由も言わずに説教をしたのには、合田部長には知られたくないことであるというまっとうな理由があった、ということ。

エ 知る権利を主張することは、合田部長以外の人にとっても大切で、村人に隠すことが危険や違法性につながることもあるのだ、ということ。

問10 ――線部⑩「深く頭（こうべ）を垂れた」とありますが、このときの気持ちとしてふさわしいものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宮口本部長の数年がかりの計画だと知らずに直訴したことに対し、申し訳なさを感じている。

イ 妻の麻美と息子の建斗を悲しませることはするまい、と会社にへつらう決意をしている。

ウ 自分を信じて庇ってくれた上司に対し、申し訳なさと感謝とを感じている。

エ 親友の浩之をだますかたちになってしまったことに対し、早くも後悔と後ろめたさとを感じている。

問11 ――線部⑪「合田部長の貧乏ゆすりは止まった」とありますが、なぜだと考えられますか。最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宮口本部長の顔を立てることができ、説教のプレッシャーから解放されたから。

イ 普段の山川からは想像もできない大胆さに、あきれはててしまったから。

ウ おとがめを覚悟したうえで直訴に及んだ山川が、推進派に賛同してくれて安心したから。

エ 深く謝罪の意をあらわした山川に対し、怒りの気持ちが小さくなったから。

三　次の各問いに答えなさい。

問1　次の①～⑤の文の――線部の**カタカナ**を適切な漢字に直しなさい。

① **キュウフ**金制度を活用する。
② 環境汚染（かんきょうおせん）に**キキ**感を抱く。
③ **イジョウ**気象による被害が発生する。
④ 製品の安全を保証する**キジュンチ**。
⑤ 社会問題を**タカク**的な視点から考察する。

問2　次のことわざや慣用句・四字熟語の□に入れるのに最も適切なものを、次の**ア**～**カ**の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① □を見るよりも明らか。
② □清ければ月宿る。
③ □前の灯（ともしび）。
④ 付和□同。
⑤ □垂れ石を穿（うが）つ。

ア　風　　**イ**　水　　**ウ**　火　　**エ**　雨　　**オ**　雷　　**カ**　炎

以下余白